

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

昨年 2018 年のドル/円相場は、当初想定していたように 2017 年と同様のレンジ相場が継続しました。

年間の値幅は 10 円を下回り過去最少、2017～2018 年の 2 年間を通して値幅は 14 円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が強調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、本年年明けの 1 月 3 日に 108 円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドル短期に 4 円以上の下落という動きが引き起こされました。

その後、1 月の米 FOMC では声明文から追加利上げのバイアスが削除され利上げ継続という政策スタンスが大きく変わったことにより米国株式およびドルは持ち直しました。

また、米経済指標は好調を維持するものも多く、良好なファンダメンタルズのなか金利が低位安定

ドル/円相場のトレード戦略

するという適温相場が再び始まったとの期待が強まりました。

さらに6月のFOMCで米国が利下げ方向へ政策変更したことが明確となり、実際に7月のFOMCでは10年ぶりの利下げが実施され、追加緩和への期待も大きいことからドル安が進みました。

また、米国が9月から対中追加関税の実施を発表したことで、米中貿易摩擦値の警戒感が高まり、ドルは105円台まで下落しました。

ただし、米国の追加利下げ観測が強まるものの、米国景気はまだ成長を維持しており、ドルが一方的に売り込まれる経済状況にありません。

目先は、104円～105円水準を底値と意識しての戻り売りがメインシナリオとなるものと思われ、104円～108円レンジを想定します。

■短期展望

先週は、米中貿易摩擦への懸念から東京時間早朝には年初のフラッシュクラッシュ以来となる104円台を付けて始まりました。

しかし、その後はドルの買い戻しから105円後半での小動きが続き、週後半には106円68銭まで値を戻し、106円台を維持して週を越えています。

今週も、米中貿易摩擦への懸念は残り、ドルの上値を抑える要因となるでしょうが、ドルの下値を売り込んでいく材料にも欠け、先週の105円割れが目先底打ちとなる可能性もあることから方向感のない動きが続きそうです。

また、週末の米湖東洋系を見極めたいとの思惑も強く、様子見姿勢が強まることも予想されます。したがって、今週のレンジは105円半ばから107円水準と考えます。